# ことわざ辞典

# ことわざ辞典

文学博士　臼田甚五郎　監修

# はしがき

日本のことわざは庶民の間から江戸時代に多く生れたものといわれるが、人々の喜びや悲しみや憤りばかりでなく、自然と人間との関り合いや動物、植物の生態に至るまで、その内容はさまざまである。一口に生活の知恵というにはあまりに中身は多種多様で、しかもこれは書かれた知恵ではなく、口から口への伝承によるというところに特色がある。無学な人々同士の間で直観的に諒解されるいい方、使いやすさが身上である。だからここには推理や究明や判断などはなく、いきなり結論ばかりが累積していることになる。そのいずれもが、ながい経験の積み重ねによって得られた知恵であって、決して単なる人生教訓や処世訓のみに止まるものではない。

江戸時代の低い階層といわれた商人や農民や職人の間から生れたことわざは、したがって今日の一般庶民の間にも充分通用するもので、まだまだ生きていることばといっていい。社会がいかに複雑化しても、人間の本質が変らぬかぎり、今後もこれ等のことばは生きつづけることであろう。

本書には五千余のことばを収めたが、その中に極めて僅少ではあるが、特に日常化している中国故事と西洋のことばを挿入した。これがないとむしろ不自然なほど日本のことわざ化しているものばかりである。また本書の特色の一つとして強調したいのは、若い人たちにも納得の行くように現代の視

点から考えたり解釈したことである。そのために古いことばも生き生きと蘇った感が深い。やはり名言は長く生きつづけるものである。

本書の監修に文学博士臼田甚五郎先生を頂いたことは編者として望外の喜びであると共に深く責任を感ずる次第である。また編纂に当っては主として鈴木栄三、広田栄太郎編「故事ことわざ辞典」に御教示を受けた。その他折井英治編「暮らしの中のことわざ辞典」、守随憲治監修「故事とことわざの辞典」、大後美保著「新説ことわざ辞典」など数種の辞典の外、朝日新聞連載の「医学のことわざ」等を参考にさせて頂いた。ここに誌して諸書に深く謝意を表する次第である。

昭和四十六年五月

編者

○本書は学究的な文献ではないので、必要と思われるものを除いて特に出典を記載しなかった。

○類似のことばは(参)として、なるべく多く説明の後に掲げた。地方によって言い慣わしがいろいろ違うからである。

○中国故事は特に註を付けないが、西洋のものは(西諺)とかならず付記した。ただし、欧文の出典はすべて省略した。

○なお、本書とともに日東書院版「故事成語辞典」をお備え下されば、故事とことわざの大観が座右のものとなります。御併読を希う。

# あ

**ああ言えばこう言う**　相手のことばに対して素直にならずに、あれこれと屁理屈をつけて肯定しないこと。うるさ型。一言居士。

参どう言やこう言う。右と言えば左。山と言えば川。天の分地の分に言いなす。

**合縁奇縁**　人と人とが愛し合ったり和合したりする微妙な心理作用をいう。殊に男女の好き嫌いには他人の伺い知れぬ妙趣があるもの。「あんな美人があんな醜男と夫婦とは」とか「あんな立派な男があんな醜女を好くとは」などとよく世間でいわれる。縁の不思議さで、虫が好く、虫が好かないともいう。

参合愛奇愛。愛縁機縁。合性奇縁。縁は異なもの味なもの。蓼食う虫も好き好き。

**愛多ければ憎しみ至る**　愛されることが多ければ他人から嫉まれて憎しみを招くことになるのをいう。主人の寵愛が深かったり、多くの異性から好かれるものは、他人からはひどく憎まれるものである。「愛多ければ則ち憎しみ生ず」元倉子

参愛は憎の始、徳は怨のもと。

**愛多ければ憎しみもまた多し**　前項のことばと違いこれは愛情そのものの中に憎しみが宿っているということで、愛憎は表裏一体をなすものである。愛にひそむ強い独占欲の現われというべきであろう。男女愛情のもつれや肉親の争いほど深刻になるもの。

参愛憎は紙一重。愛は憎の始まり。可愛さあまって憎さ百倍。

**七首に鐔**　ふつりあいな物のたとえ。あいくちはもともとつばのない短刀である。つばをつけると却って不似合になる。

参小刀に鐔。小刀に金鐔を打ったよう。

**相碁井目**　相碁は対等の実力者で碁を打つことで、井目（聖目ともいう）は九目のハンディをおいてから打つ弱い相手の場合。同じことをしても人の腕前の上下は限りなく多くあるものであり、人の賢愚もさまざまであること。

参世はさまざま。上には上、下には下。

**挨拶は時の氏神**　けんかや口論の中に入って仲裁してくれる人は、その時に氏神さまが出現したように有難いものと思って、そのいうことに従うべきであるの意。双方が意地を張って今さら後へは退けず、ついには災いとなる事態を未然に防いでくれた救いの神として、その出現に感謝すべきである。挨拶はあつかい、仲裁のこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

㊂仲裁は時の氏神。仲人は時にとっての氏神。地獄で仏。

**挨拶より円札**　虚礼よりも実利がいい。口先だけの挨拶では、いくら叮重にされても腹はふくれない。

㊂思召より搗いた飯。

**愛してその醜を忘る**　本気に愛してしまうと、その相手のよい所ばかりが目について悪いところは分らなくなるもの。しまいには悪いところも逆によく見えてくる。

㊂あばたも笑くぼ。惚れた欲目。恋は盲目。恋すれば色の文目もわきまえず。

**愛する人に物を貸すな**　物や金を貸したり借りたりしたために、終いに不仲になる例が多い。特に友人の間では、貸借のないことが永つづきの秘訣である。

**愛想づかしも金から起る**　女が男に対する愛情が冷めたり、縁切りを迫ったりするのは、金が思うように貰えぬのが主な原因である。

㊂金の切れ目が縁の切れ目、夫婦喧嘩も無いから起る。

**愛想も小想も尽き果てる**　すっかり愛想がつきて、いやになってしまう。愛想は愛着心の意で、小想は語呂を合せて語勢を強めたもので意味はない。「この身は何たる大悪人、あいそもこそも尽き果てた」桂川連理柵

**逢いたいが情見たいが病**　恋愛が高まってくると、熱病と同様で、逢いたい、見たいと思う心を押さえきれないものである。

㊂一日逢わねば千秋。逢いたい見たさは恋のとが。逢いたいわいの見たいわいのせくわいの。

**相対の事はこちゃ知らぬ**　当人同志が二人きりでしたことは、自分には無関係である。何の相談もなしに行われた結果については責任はもてぬ、というはねつけることば。アユ、タイ、コチの魚名をつかって秀句にしたもので、諧謔味を盛ったところがミソ。

**開いた口には戸はたたぬ**　他人の口は封ずることはできない。自分の悪いうわさや勝手な評判や陰口をされても防ぎようがない。

㊂下種(げす)の口には戸は立てられぬ。下蔦は口さがないもの。

**開いた口へ牡丹餅**　運のいいときは、俗にいうついているときは、努力をしなくとも幸いが向うから到来するものである。

㊂棚からぼた餅。寝耳へ小判。大鴨が葱を背負って舞い込む(西諺)。あんころ餅で尻をたたかれるよう。あいた口へだんご。あいた口くりこ餅の飛込んだうまい首尾。

**相手変れど主変らず**　相手は

そのたびに変っても、こちらはいつも同じなのをいう。世俗変転の相を暗示するとともに、旧態依然として人後にあることにもいわれる。

**相手のさする功名**　自分の実力や努力によるのではなく、相手が劣っていたり、方法がまずかったりして、思いがけない手柄をたてることがあるのをいう。拾った勝。

**相手のない喧嘩はできぬ**　どんな乱暴者でも相手がなければ喧嘩はできない。だからどんなに喧嘩をしかけてきても相手にしなければ決して喧嘩は起らない。売りことばに買いことばで、相手になることが悪い。喧嘩は双方の責任でもある。

㊥相手なければ訴訟なし。一人喧嘩はならぬ。気違いも一人は狂わぬ。気違いもただは怒らぬ。喧嘩ともっこは一人じゃできない。

**相手見てからの喧嘩声**　相手が弱そうだと分ると急に威たけ高になる。弱腰と見たら高姿勢になる。から威張り。

**あいの返事に難はなし**　何人に対しても、また何事につけても従順で素直にしている者は無事である。「あいあいの返事一つで天地も人も我が身も円く治まる」。

**愛は小出しにせよ**　あまり激しい愛は永つづきしない。細く長く愛情を生かすことが肝要である。

㊥熱しやすく冷めやすい。どか惚れのどか飽き。

**愛は憎悪の始**　人とつき合って、その寵愛に狎れすぎたり、親しさに甘えすぎたりすれば、こんどは憎み合うことになる。愛の心理の中に既に憎しみの要素が宿っているものと思い、節度を守ることが大切であるという戒め。

㊥愛は憎の始めなり、徳は怨の本なり（管子枢言篇）。愛多ければ憎もまた多し。愛憎は紙一重。可愛さあまって憎さ百倍。

**相惚れ自惚れ片惚れ岡惚れ**　惚れ方の種類をまとめたことば。相惚れは好き同志の相思相愛の愛。自惚れは独りよがりの強引な愛。片惚れは磯のあわびの片思いといわれる可憐な愛。岡惚れは秘かに心中で憧れる愛をいう。

**逢い戻りは鴨の味**　一度別れた男女の仲がもとに戻ると、その情合は前にも増してこまやかになるもの。昔馴染み、幼馴染みも同じ。

㊥いとこ同士は鴨の味。

**逢うは別れの始め**　逢えばかならず別れのときがある。始めがあれば終りがあるのと同様である。「始めより逢うは別れと聞き乍ら暁しらで人を恋ひける」定家

㊥盛者必滅、会者定離（仏語）。合は離の始め、楽しみは憂いの伏すところ（白氏

文集)。逢うは別れのもと。逢うは別れ。

**敢て主とならずして客となる**　積極的な行動をせずに常に受身でいること。人の先に立とうとして争わないのが保身の道である。

㊂兵を用うるに言あり、われ敢て主とならずして客となる。敢て寸を進まずして尺を退く(老子)。

**逢えば五厘の損がゆく**　人と交際すればかならず何ほどかの出費があって損をする。むだなつき合いはなるべく避けて出費を少なくするよう心がけることが肝要。しかし義理人情を欠いてまで出費を防ぐのは行きすぎであろう。

㊂さわり三百、さわらぬ神に祟りなし。

**仰いで唾はく**　天を仰いで唾をはくと、自分の顔の上に落ちてくる。人に害を与えようとして、かえって自分がひどい目にあうたとえ。

㊂悪人賢者を害せんと欲するは、天を仰いで唾はくが如し、唾天を汚さず還りて己が面を汚す(四十二章経)。天に唾す。天を仰いで唾す。

**青柿が熟柿弔う**　まだ青くかたい柿の実が熟柿の落ちてつぶれたのを見て、ひどく気の毒がって同情する。しかし間もなく自分も熟して同様の身の上となることを忘れていることから、少しばかりの差違や優劣を誇大に考えて他を云々することのたとえ。

㊂五十歩にして百歩をわらう。昨日は人の上、今日は我が上。人の事は我が事。目糞が鼻糞をわらう。猿の尻笑い。

**青田褒めらば馬鹿褒めれ**　まだ実のらないうちの稲田のできのよいのは、あてにならぬことをいう。人間も子供の頃の神童は、二十すぎればただの人で、あてにならぬものである。

㊂子供と青田はほめられぬ。青田ほめる馬鹿。青田と手前の嚊ほめる阿呆。

**青菜に塩**　菜っ葉に塩をかけると、ぐんにゃりとなる。つまり元気がなくしょげている形容につかわれる。塩は水分を吸いとる作用をするからである。

㊂青菜を湯につけたよう。菜の葉に塩をかけたよう。

**青菜は男に見せな**　青菜はかさ張って大きく見えるが、ゆでると小さく縮んでしまうので、そういうことを知らぬ男には大きい青菜のうちは見せない方がいい。そうでないと無用の疑問を抱かれるから、というのである。人事すべて疑われそうなことはなるべく避けた方が賢明であるということ。

㊂男に青菜見せるな。つましい男に青菜見せな。

**青は藍より出でて藍より青し**　青い色の染料は植物の藍からつくるのであるが、もとの藍の色よりも

濃いものになる。弟子がその師より優れている場合のたとえにいう。

◎出藍の誉。紺は藍より出でて藍より濃し。氷は水より出でて水よりも寒し。藍を以て青きを染むれば則ち藍よりも青し。

**青葉は目の薬** 仕事や読書などで目の疲れたとき、遠い山や青葉を眺めると気持が沈静されて神経の疲れが癒やされる。書籍の装釘に青色でつぶすのが嫌われるのは、気持が沈んで購買力を弱めるからといわれる。「夏山は目の薬なる新樹かな」毛吹草

**青表紙を叩いたものにはかなわぬ** 学問のある者にはかなわないということ。青表紙は経書。

**赤い信女が子を孕む** 未亡人が私通をして妊娠すること。夫が死亡すると墓石に戒名を刻むが、それに並べて未亡人の戒名もつくり掘っておいて、これに朱を塗っておく風習がある。戒名では女は大姉、信女となるが、赤いうちは生きているわけである。

◎石塔の赤い信女が子を孕み（柳樽）。

**赤いは酒の咎** 顔が赤く怖しそうに見えるかもしれないが、それは酒のせいであって、私の性格とは関係ない、という酒間の軽口。

◎赤きは酒の咎ぞかし、鬼とは思し召されそ（御伽草子・酒顚童子）

**赤児のうちは七国七里の者に似る** 赤ん坊のうちは、まだ特徴がはっきりせず、いわば原型的な面なので、どこの誰にでも似ている点がある。特定の誰かに似ているというのは大人たちの放言にすぎないであろう。

**赤子の手をひねる** 楽々とできる。実力がひじょうに違う場合につかわれるたとえ。

**赤子と搗きかけの餅は手荒いがよい** 赤子はあまり大事にしすぎては弱い体質になる。餅は搗き始めたらどしどし搗いてしまわないと、いい餅にならない。

**赤子は泣き泣き育つ** 赤ん坊の泣くのは悲しいからではなく、健康だからである。健康な子ほどよく泣くものである。

◎泣く子は育つ。

**赤子を裸にしたよう** 自力ではどうにもならず、放っておけば自滅するより外方法のない絶望的な状態をたとえたことば。

**上って三代下って三代** 親類関係は先にも後にも三代ぐらいまでは交渉があったり、覚えていたりするが、それ以上の遠い代になるとほとんど他人同様となるもの。

**垢で死んだ者はない** 風呂の嫌いな者の言いぐさ。また風呂ぎらいに対する皮肉のことばにもつかう。入浴は一と月に一回というのはたまにはあると聞いているが、本人は案外健康である。

㊗垢に食われても死にはせぬ。

**垢は擦る程出るあらは探す程出る** 欠点を探し出せばきりがない。垢はこすればこするほど、次から次へと出てくるのに似ているというたとえ。

㊗叩けばほこりが出る。

**垢も身のうち** 「腹も身の内」をもじって、いつまでもごしごし身体をこすっている人を冷やかしたことば。（浮世風呂）の中のことばだが、皮膚の表皮についた垢は、身体の一部というより皮膚の一部とはいえるかもしれない。

**明るい家には金溜らず** 陽光がいっぱいに入っている明るい家には金は溜らない。これは古い京都などの考え方で、間口をせまく目立たないようにし、格子窓や格子戸で極力光を防いだ暗い建て方をした。一つには相次いだ戦乱に対する自衛方式でもあったろう。しかし現代ではこの逆で暗い陰気な店頭では客は入らない。極力照明をあかるく、そして入口をひろくしている。明るいを派手な家庭と解すれば、やがて貧乏におそわれる、ということで、現代にも通用する。質素倹約の生活でなければ金はたまらない。

**明るけりゃ月夜だと思う** 考えが浅く、世間を知らないことをいう。明るいのにもいろいろな原因があるが、それを明るければなんでも月夜にしてしまう、馬鹿の一つおぼえみたいなのをたとえたことば。

㊗団子さえ食えば彼岸だと思う。あずき飯たけば初午とみる。馬鹿の一つ覚え。

**垢を洗うて痕を求む** 垢を洗い落してわざわざ傷あとを出すことで、つとめて他人の欠点をあばくことのたとえ。また他人の落度をあばいたことで、逆に自分のぼろを出してしまうことにもつかわれる。

㊗毛を吹いて疵を求む。藪をつついて蛇を出す。藪蛇。

**秋荒れ半作** 秋になって天候が荒れると、収穫が半分にも減るということ。

㊗秋日より半作。秋上げ半作。

**商賈と屏風は直に立たぬ** 己れの感情をそのまま出すことをせず、じっとおさえて堪忍するのでなければ商人は成功することができない。正しいからといって理屈を通していれば客は遠ざかってゆく。

㊗商人と屏風は曲らねば立たぬ。

**秋風が吹く**　秋風の冷めたさから、心がわりして冷淡になることを意味する。また秋風を飽き風ときかしてもいる。

**秋風と夫婦喧嘩は日が入りや止む**　秋風は夜に入ると静まるもの。同様に夫婦のけんかは日が暮れると、つまり就寝前には大抵おさまるものであるの意。

◎夫婦喧嘩と北風は夜凪ぎがする。

**秋梭魚は嫁に食わすな**　季節のうまいものを農漁村ではよく嫁いびりを道具にしたいい方をする。とてもうまいという意。

◎秋なすび嫁に食わすな。秋さば嫁に食わすな。秋ふき嫁に食わすな。五月わらび嫁に食わせるな。秋たなご嫁に食わすな。

**秋雁が早く渡ると豊作**　夏の暑さが烈しいと寒い秋の訪れもはやい、という天候の前提で、それを雁の姿にもとめて判断したことば。気候が不規則で、夏の暑さが低いと作物の発育も不充分であり、まただらだらと残暑がつづくと雁の訪れもおそいことになる。

**秋財布に春袋**　秋に財布を縫うのは空きに通じてわるく、春は張るだから春縫う財布は縁起がいいという一種の語呂合せの迷信。

◎あめつちを袋に縫う。

**秋鯖の刺身にあたると薬がない**　さばは腐りやすい魚であるが、殊に秋のさばの中毒は激しいものであるという。

**秋柴嫁に焚かせろ**　秋柴は烟が多くて焚きにくい。要するにいやなことは嫁にやらせ、楽なことは娘にやらせるという、嫁いびりをつかって仕事の苦楽や難易を形容したことばである。

◎夏の火は嫁に焚かせろ。冬の火は娘に焚かせろ。八月柴嫁にたかすな(反対)。夏肥は嫁にもかがせるな（臭気の烈しさをたとえたもの）。

**空樽は音高し**　中味のつまった樽はたたいても重々しい音しかしないが、空っぽの樽は高い音がする。軽薄なおしゃべりには中味がない。小人の常である。「江戸っ子は五月の鯉の吹流し、口さきばかりで腸はなし」というのは江戸っ子の淡白さを謳ったものであるが、中味がないという点では共通である。

◎浅瀬に仇浪。食いつく犬は吠えつかぬ。

**商三年**　商売を始めても三年たたねば一人前の基礎はできないし利益も上らない。何事も三年辛抱せねばものにならない、ということで、三年を一区切りにすることが多い。ビジネスマンも三年で一人前。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◎石の上にも三年。売り出し三年。あごふり三年。

**商上手の仕入下手**　お世辞がよくて売ることは上手でも、仕入れが下手で高いものについては、いくら売っても利益は上らない。骨折損のくたびれ儲けである。また人間には長所、短所、向き不向きがあるもので、一人で何でも出来るものでない、という意味である。「話し上手の聞き下手」などは一人よがりに通ずる。

**商は牛の涎**　商売というものは、牛のよだれが細くながく、切れ目なく流れ出るように、こつこつと気永に辛抱づよくよくはげめということ。せっかちに大きな儲けを急げば失敗する。

**商は数でこなせ**　薄利多売。利益を少くして多く売るのが商売繁昌のこつである。

**商は門門**　客を見て、それに応じた品物を売るのが商売のこつであるということ。また買い手からいえば商売はそれぞれ専門があるので、専門店で買うのが一番安全であるということ。

◎商売は門門。餅は餅屋。商売は道によって賢し。芸は道によって賢し。

**商は本にあり**　商売の成功、不成功は、投下された資本の大小に支配される。大資本の威力にはかなわないもの。

**秋茄子嫁に食わすな**　秋口のなすびはうまいので、嫁には食わせるな。嫁いびりの口実でそのうまさを表現したことば。うまいもの、楽なことはすべて娘へ、ということになるが、たまたまこのなすびは、身体が冷えて毒になるとか種子が少いことから、子種にかけて、姑が心配して嫁に食わせぬようにするという説も生れた。医学的にも秋なすにはソラニンというアルカロイドが含まれていて、これが流産を促す作用があるとされている。

◎秋梭魚は嫁に食わすな。秋鯖嫁に食わすな。夏蛸嫁に食わすな。こちの頭は嫁にくわせ（肉が少ない）。五月わらびは嫁にくわすな。秋茄子嫁に食わせよ。二月のそうはちなら花嫁にくわすな。

**秋になればほいと腹になる**　秋になると食欲が進むのをいう。ほいとはこじきのこと。がつがつ食べたがること。

◎秋のかわきは人につく。秋の腹さ餓鬼はいってる。

**秋の雨が降れば猫の顔が三尺になる**　秋の雨が降ると南から暖気が流れこんで気温が上ってくるので、寒がりの猫はのんびり顔を長くして喜ぶことをいう。

◎冬の雨が降れば猫の顔が三尺のびる。

**秋の鰍魚と娘の粗は見えぬ**　若い娘の欠点は見のがされがちであるということ。あらは深海の岩陰に棲んで姿を見せないので、秋には漁獲されず、冬になってとられる。

**秋の入り日と年寄は落ち目が早くなる**　秋から冬にかけて日没は一日ごとに早くなるが、老人も年をとるに従って老衰が目に見えてはやくなるものである。

**秋の鹿は笛に寄る**　秋になると鹿の雌雄は互いに求め合うが、この時人間が雌鹿の鳴き声に似せた鹿笛を吹くと、雄鹿はだまされて寄ってきて捕えられる。恋に身を滅ぼしたり、弱身につけこまれたりすることのたとえにつかわれる。

㊗妻恋う鹿は笛に寄る。笛に寄る鹿、火に寄る虫。笛に寄る鹿は妻を恋う。女の足駄で造った笛には秋の鹿が寄る。笛に寄る秋の鹿ははかなき契に命を失う。

**秋の空は七度半変わる**　秋の空の変りやすいことから、心の変りやすいことのたとえにいう。

㊗男心と秋の空。秋の空。

**秋の日と娘の子は呉れぬようで呉れる**　秋の日はまだ明るいと思っていると急に暮れるが、娘も両親が大切にしていて、なかなか手放さないように見えていて、案外あっさりくれる場合が多いようである。

㊗春の日と継母は呉れそうで呉れぬ。

**秋の日は釣瓶落し**　秋になると日暮れがはやくなる。明暗が急なのである。その速さは井戸の中へつるべを落すようだというのだが、これは少し大袈裟である。もっとも昔の人は光陰矢の如し、などという形容詞もつくっているが。

㊗秋の日の鉈（なた）落し。

**秋の夕焼鎌をとげ秋の朝照隣へ行くな**　秋の夕焼の美しいときは翌日晴天になるしるしだから、鎌をといで畑仕事の支度をした方がいいし、朝照るのはしだいに雨になるしるしだから、隣近所へ行くのもとりやめにした方がいい。西高東低は冬型の天候であるが、日本は西の大陸からの気象に左右される。夕焼けは西が晴れているしるしで、すでに翌日の晴天は約束されていることになる。

㊗秋の夕焼鎌磨いで待て五月の夕焼簑着て待て。

**秋日に照らせりや犬も食わぬ**　夏の陽光は暑く烈しいので、帽子などいろいろのもので案外日焼けを防いでいるが、秋晴れの陽光は暑くなく寒くなく、ひじょうに気持が快いのでつい素顔でいることが多い。そのために徐々に日焼けした色は冬

になってもなかなかぬけないもの。そこで未婚既婚の若い女性に秋日を防がせようと少し大げさに警告したことば。昔は色白が美人の条件。

㊗秋の日に焼ければ乞食も嫁に貰わない。

**秋日和半作** 秋の天候のよしあしがその年の作物の豊凶の半ばを支配する。二百十日前後の台風の期間が、稲作の収穫をきめる重要なキメ手になるので、農民は夜も眠られぬという。農薬の普及した現在でも、秋の天候の影響から全く脱れてはいない。

㊗秋荒れ半作。秋場半作。秋日和半日和。秋彼岸の照りは豊年。

**秋は山から春は海から** 秋は山から晴れてくると天気がよくなるし、春は海が晴れると快晴になる。現代では観光の上からも秋の山と春の海は景観が特に優れている。

㊗秋は山夏は海。夏海秋山。秋山春海。

**明家で声嗄らす** いくら努力しても人に認められないことのたとえ。あき家の中で、声を嗄らすほどいくら歌っても、誰もうまいとほめてくれない。むだなことのたとえ。

㊗明家で棒振る。縁の下の舞。縁の下の力持ち。楽屋で声からす。陰の舞の奉公。

**明家の雪隠でこえなし** 人の家を訪ねていくら呼んでも何の返答もないときのしゃれた地口。あき家だから便所には肥えがないのと、答えの声がないのとをかけたしゃれ。

**諦めは心の養生** いたずらに過去の失敗をくよくよ思いわずらうのは健康にもよくない。あきらめが肝心で、将来の希望に生くべきである。「出る月を待つべし、花の散るをうらむことなかれ」

**呆れが礼にくる** あきれかえったことを誇張していったもの。よくぞあきれてくれたと、あきれが礼にくるくらい、ということだが、あまり意味はない。

㊗あいた口がふさがらぬ。くそがあきれる。呆れかえるの頽冠。呆れが股引で礼に来る。

**秋葉山から火事** 他人を戒めているうちに、おひざ元からあやまちを起すことをいう。秋葉神社は防火の神であるが、その秋葉の山から火事が出たのでは皮肉も甚だしい。世間には案外この実例が多いもの。

㊗火消しの家にも火事。

**商人に系図なし** 商人は努力や実力で成功するもので、家柄や格式は必要でない。

**商人の虚言は神も御許し** 商人がかけひきでいう嘘はやむをえないことで、これだけは神様もお許しになっている。本当に許しているか

どうか、これは商人側のことばだからアテにはならない。

**商人の子は算盤の音で目をさます**　武士は馬のくつわの音や鐔鳴りの音で、目をさますといわれるがこれは油断するなの心得である。これに語呂を合わせた町人の心得のことば。眠っていてもそろばん玉をはじく音で目がさめるという、習い性となって損得の計算にさといものであることを意味する。

㊂武士はくつわの音で目をさます。乞食の子は茶碗の音で目をさます。

**商人の空値**　商人は相手を見て、かけひきで値段をつけるので、本当の値は分りにくいものである。

㊂商人の元値。

**商人の元値**　商人は客にものを勧めるとき、それでは元値ですとか、元値をきって勉強しておきますといって売りつけるが、いかにも損をしたように見せかけて、実際には儲かっているので、本当の元値はさっぱり分らないことをいう。

㊂商人の空値。

**商人は木の葉も錦に飾る**　商人はつまらない物でも立派なもののように飾り立てて客に売りつけるのが腕である。

**商人は損していつか倉が建つ**　商人はいつも儲からない、損をしたと口癖にいいながら、いつの間にか倉を建てる。商人は損などするはずがない。

**商人は矢の下くぐれ**　商人は時には思いきって冒険をおかさなくては、大きい利益を得られないというはげまし。

**悪縁ちぎり深し**　よくない縁、くされ縁はなかなか断ちがたいものである。悪友や悪の道、またわるい習慣などは断ちがたいものであるが、良友や良い習慣は失いやすい。

㊂悪女の深情。くされ縁はなれず。

**悪貨は良貨を駆逐す**　有名なグレシャムの法則。通貨の良質のものはみんなが一旦手に入ると放さないで、支払には悪質のものだけをつかう。だからいくら良質を発行しても流通せず、悪質のみが市場に出まわるもの。

**悪妻は百年の不作**　悪い妻をめとると自分一人だけの不運不幸にとどまらず、子孫の代まで悪い結果をおよぼす。これは女性の方からいっても同じことである。

㊂悪妻は六十年の不作。悪妻は一生の不作。悪婦は家を破る。女房の悪いは六十年の不作。

**悪妻は六十年の不作**　悪い妻をもつと一生の不幸である。子供がいたり、世間体があったりして離婚

もできず、一生を妻に苦しめられて生きることになる。だから結婚の相手は慎重に選ぶべきで、若気の一旦の過りは一生を台なしにするぞ、という厳しい警告。悪妻を悪夫としても同様である。

◎悪妻はこの世の地獄のはじめ。悪妻は百年の不作。悪妻は一生の不作。悪妻は家の破滅。

**悪事千里を走る** 他人の悪事はあばきたがるのが人情の常である。善事はなかなか一般には知られないものだが、悪いうわさは尾びれがついて忽ち遠方まで伝わるものである。現代では週刊誌などが専らこの役目を果している。

◎隠す事千里。悪い報せは翼をもつ（西諺）。好事は門を出でず、悪事は千里に伝わる（事文類聚）。

**悪事身にかえる** 自分の犯した悪事は、結局は自分にかえってきて、そのために今度は自分が苦しむことになる。悪の報いはてきめんである。

◎因果応報。自業自得。天に唾する。身から出た錆。人を呪わば穴二つ。悪事身にとまる。悪人は我がつくりしものに捕えらる。人捕る亀が人に捕らる。

**悪獣も猶その類を思う** 他に危害を加える猛獣でさえも、同類に対しては愛情をもっているもの。いわんや人間同志は愛し合わねばならぬ。どんな兇悪な悪者でも仲間に対しては仁義をもっている。

**悪性の気よし** 浮気者や道楽者には気のよいものが多い。悪気がなく、さっぱりしているので女にもてる。そのため他からは不良性に見られるわけである。悪性は浮気者のことで女性側の妬心から出たことば。

**悪女の賢者ぶり** 邪悪な心の女が、表面だけは賢女や貞女ぶってふるまっていることで、鼻もちのならぬ偽善者である。もちろん男にもいるが、世の中には案外これが多い。

**悪女の深情** 醜婦は美人よりも愛情が濃く、嫉妬心がつよい。有難迷惑の場合につかわれることば。

**悪女は鏡を疎む** 醜婦は鏡に向って自分の顔を眺めることを好まない。鏡をきらう。人間は誰でも自分の欠点や弱点にふれることを好まないことのたとえ。

◎悪女は鏡を恐る。

**悪心は降る雨** 地面が乾くと雨があとからあとからと降りそそいで濡らしてゆくように、悪心も取り去ったり改めたりした後から次々に湧いてきて、絶えることのないのをいう。悪知恵には限りのないもの。

**悪銭身に付かず** 不正な方法で得た金はつまらないことにつかっ

て、忽ちなくしてしまうもの。苦労して得た金やこつこつ貯めた金は大事にするが、競輪競馬や賭博などで得たあぶく銭はとかく酒や女で費消するのがオチである。

◎あぶく銭は身につかぬ。不義の富貴は浮雲の如し。貨悖りて入るものはまた悖りて出ず（大学）。

**悪に強ければ善にも強し**　大悪人ほど一たん改心したとなると、非常な善人になる。どちらにしても中途半端ではないものである。

◎悪に強きは善の種。悪に強き者はまた善に強し。善に強ければ悪にも強し。

**悪人あればこそ善人も顕われる**　世の中は善人ばかりなら、善人というものはなくなる。悪人もいればこそその対照として善人の存在は目立つのである。もっとも一人の人間でも、時によって悪人になったり善人になったりする。

◎下手があるので上手が知れる。馬鹿があって利口が引立つ。

**悪人には友多し**　悪人は口がうまく利をもって誘うので、すぐに多くの友をつくる。これに反して善人はよい友を選ぶので、なかなか友ができないものである。

◎君子は誠にして拙、迂にして直なり、故にこれを知るもの寡し。

**悪人の友を棄てて善人の敵を招け**　たとえ自分を助けてくれる友人でも、悪人であったならば結局身のためにならないから、これを拒否せよ。また自分を憎んでいる人でも、それが善人ならば、悪い友人よりましである。

◎悪人に褒められんより善人に笑われよ。悪友の笑顔より善友の怒り顔。

**悪人は刀の試し物**　悪人は刀の試し斬りの材料にされるくらいしか世の中の為にならぬ。普通人の扱いはできないということ。

◎悪人は畳の上では死なれぬ。

**悪の裏は善**　人間は悪いことがあれば、その次には善いことがあるもの。悪いことばかりでもないし、善いことばかりでもない。人生はあざなえる縄の如くで、悪いときでも希望を捨ててはいけない。

◎一の裏は六。いいことがあれば悪い事がある。善の裏は悪。

**悪の報いは針の尖**　悪事を犯した報いは、針のさきをまわるように、あっという間に我身にもどってくる。

◎因果は皿のふち。

**悪は一旦の事なり**　悪いことは一時は勢いを得て盛大になることがあっても、結局は正義には負ける。決して永続きするものではない。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com